

## それぞれの春 アナザーストーリー

### 競技場にて

東部の応援席で、私を見て挨拶をして下さっている方がいた。あれ？高校教諭と勘違いされたかな・・・と思ったのだが、「野本さんですよね？」とおっしゃった。続けて「奥岡です」と・・・そう！奥岡真也くんのご尊父だったのだ。

### 伝説のハードラー

奥岡真也選手は、言うまでもないが14秒65の春高記録、同時に東部地区大会記録保持者でもある。現在の高校生は顔を知らない年代になったのか・・・と時間の経過の早さに、いまさらながら驚く。

創部90年で110mH唯一のインターハイ入賞者だ。（ただし、大木正美さんという例外を除く・・・）  
関東総体2冠。在学中はその才能をいかに発揮し、春高陸上部への貢献した。

奥岡選手のお父様が、わざわざご挨拶に来て近況などを教えて下さった。

### 中学は幅跳びで

意外にも奥岡選手は、ずっと幅跳びをやっていたそう。その長身と、バネを活かして110mJHを始めたのは中学2年の夏だったらしい。その結果、たった1年後の全日本中学選手権で14秒75の入賞を果たす。



## 2002 全日本中学 110mMH

決勝		(22日・+1.6)	
1) 14.04	大蔵 崇史	(野田 3石川)	
2) 14.29	飯田 将之	(弥富 3愛知)	
3) 14.40	岩見 勇志	(南稜 3愛知)	
4) 14.62	菅原 隼人	(比内 3秋田)	
5) 14.67	関野 邦王	(十日市場 3神奈)	
6) 14.71	是木 滝彦	(荒砥 3群馬)	
7) 14.74	奥村 昌平	(播磨南 3兵庫)	
8) 14.75	奥岡 真也	(彦糸 3埼玉)	

### 「赤シャツ」伝説の始まり

鳴り物入りで入学してきた奥岡選手は、期待を裏切らなかつた。相乗効果でチームはどんどん強くなっていった。そして栄光の「赤シャツ伝説」が始まったのである。初めて臨んだ400mHは東部新人戦。



歩数が分からないようなハードリングだったのだが、あっけなく圧勝。その格の違いを見せ付けた。

息が切れる様子も無く、優勝後のVサイン。こりゃ、すごい子が入ってくれた・・・二年後が楽しみだ・・・そう確信した。



### リーダーとして

どうしても奥岡に両リレー、そして両ハードルを頼らなければならないチームの期待に、彼は応えてくれた。翌年は新入生で後藤も入ってきた。しかし、県大会でついに体調を崩し、秋の期間まで不調は続いた。復調するや、110mHですぐに14秒台へ突入して周囲を驚かせた。

2年生の時点で110mH14秒台、400mH53秒台をマークした奥岡は、最終目標の千葉インターハイまで突き進む。

奥岡のお父様は言った。

「真也は実はハードルよりもリレーで入賞したかったのです。みんなでインターハイ入賞！それが息子の悲願でした」

そんな奥岡の願いは、みな魂に火をつけてチームは成長していく。同期の伊藤は「(400mHの負担にならないよう)奥岡抜きで、関東の決勝に行く！」とまで言った。

そして奥岡は関東で両ハードルを制し、マイルでも3位に入る大健闘をみせた。その結果、春高は数十年ぶりに埼玉最得多点高校になったのであった。

それ以降の詳細はいまさら語るまでも無い。

<http://www.kasuriku.net/nomo/138.html> へ。

## 2005千葉インターハイ男子 110mハードル

決勝 08月06日

順位	選手名	高校名(県名)	記録
1	飯田 将之	名古屋(愛知)	14秒42
2	西沢 真徳	八頭(鳥取)	14秒48
3	玉井 秀樹	洛南(京都)	14秒56
4	小野 学	東海大望洋(千葉)	14秒67



- 5 東中 陽太郎 鳥羽（京都） 14 秒 68
- 6 田中 浩介 洛南（京都） 14 秒 90
- 7 奥岡 真也 春日部（埼玉） 14 秒 96
- 8 岩見 勇志 名古屋（愛知） 15 秒 31

入学から3年のインターハイまで、走り続け、チームを牽引した。110mHでの中学、高校と連続入賞という偉業もやってのけた。悲願のリレーでも総体4位という破格の結果を残してくれた。

なにより「頑張れば全国でも戦えるんだ」・・・という希望をチームに与えてくれた。





奥岡くらいの一流競技者であっても、「競技で進学はしない」という選択をした。それも正論だ。どちらの道も平坦ではない。  
現在は理科大で競技を続けている。  
理科大には同窓も多く、春高カラーが強い理系大学だ。



「理科大は卒後もすぐに社会で力を発揮できる素晴らしい教育をする」と私も聞いたことがある。  
したがって授業や実習はかなりハードだと思われる。  
お父様に聞くと、週に2回の練習が限界だそうだ。

私の経験的にも、理科系は本当に大変である。  
歯学部の場合、レポートは週に100枚近くに及ぶこともあり、3時間睡眠も続いた。しかし、こなさなければ卒業どころか進級もできない。  
私はそれでも陸上部で走った。もちろん私はインカレを口に出来る強さではない。医歯科系大会でがんばった。試合のレベルは現在の東部大会くらいだ。  
それもまたひとつの青春。

奥岡はそんな環境下でも競技を、しかもかなりのレベルを維持して継続するのは、競技に対する愛着の表れだと思う。

日本体育協会の森丘が言っていた。「ある理工系大学の陸上監督が、ローカル試合でものすごく速い110mH選手を見て驚いたそうです。調べたら、理科大の奥岡・・・なるほどと監督は言っていました」

2年近いブランクをものともせず、早々に15秒台で走る奥岡。  
関東インカレ2部の標準に達し、レースに照準を絞っているらしい。

競技愛と才能、リーダー資質・・・うらやましい。現在6歳の、うちの息子にもそうなってほしい。(・・・いや撤回する。ウルトラマン人形で「ジュワー」っとやっている姿を見ると・・・ムリだ。)



この写真は、奥岡が高校1年生の東部新人のマイルあと。  
青春の1ページだ。

「みんなでリレーでインターハイに行こう！」  
この魂が今も継続され、  
赤き疾風伝説が始まった。

90年の春高陸上部の歴史に、さん然と一時代を築いた奥岡選手。  
彼がごく近い将来、OB会の中軸に座ってくれるのを願ってやまない。

筆 撮 (もう若手といえない)のもと歯科